

ピレネー山脈

アルパインツアー

2017年6月7~14日

フランスとスペインにまたがるピレネー山脈のハイキングである。ヨーロッパの山は、アイガーやマッターホルンの麓を歩いた(1998年)のとツールドモンブラン(2011年)に続いて3回目である。ヒマラヤのようにテントに泊まりながら移動をするような山を好むので、今回のようなすべてホテル泊まりというのは山登りを行っているような感じにはなれない。辛口で有名であった山のエッセイストの西丸震哉氏が聞いたら、“そんなもん、修学旅行みたいなもんだ!”と切り捨てられるのが落ちだ。アルパインツアーのカタログでもこのツアーは「ポレポレ倶楽部」というカテゴリに入っており、軽いハイキングという扱いらしい。そんなわけで年寄りが多く、明らかに私より年下は一人だけで、あとはポチポチか少し上である。男3人、女5人、そのうち夫婦が2組の構成である。自己紹介で、西野川ご夫妻が私と同じ狛江の住人であることが判った。ご主人はヨーロッパ勤務の経験があるらしく、ガイドとの英会話もスムーズであった。



ツアーリーダーは小笠原(2012年)でお世話になったことがあるなかしま千春さんである。ご主人がクロアチア人であるという話を聞いて思い出した。しかし過去のヨーロッパアルプスでも味わったことであるが、今回の旅も高山植物にあふれたあくまでも広い緑の高原は、世界遺産と言われるにふさわしい、のどかな美の世界をくりひろげてくれるはずである。

ツアリーダーは小笠原(2012年)でお世話になったことがあるなかしま千春さんである。ご主人がクロアチア人であるという話を聞いて思い出した。

しかし過去のヨーロッパアルプスでも味わったことであるが、今回の旅も高山植物にあふれたあくまでも広い緑の高原は、世界遺産と言われるにふさわしい、のどかな美の世界をくりひろげてくれるはずである。

① 7日・1 (トゥールーズの街)

KLM 航空を使ったので、アムステルダムでの5時間のトランジェットを経てフランスのトゥールーズの街で初日の宿泊を行った。トゥールーズはフランス第5番目の大規模都市ということであるが、福岡や横浜に比べるとだいぶ静かだ。あまり新市街に行かなかったからか



もしれないけどそれだけでは無さそう。ヨーロッパの街というものは全体にこんなものなのかもしれない。教会はすごく立派なものがあったが、キリストが手足に釘を打ち付けられたりした十字架をこれでもかこれでもかと何回も見せさせられると、ネクラのケトウ野郎の根幹をここに見たような気がして救いが無くなる。しかし学校へ通学する高校生くらいの子たちに出会うとやはりみんな都会の子だなあと思わせるものがある。街中には果物売りの屋台などもあり、なかしまさんがチェリーを我々のために買ってくれる。私にはアメリカンチェリーに見えたが、フランスではそのような呼び方はしないようだ。

② 7日-2 (ルルド)

トゥールーズからこの日の宿泊地のガルバニーへ行く間に聖地ルルドに立ち寄った。ここもかなりの大規模な聖地である。回復不可の病気にかかった人や物理的なダメージを持った人でも願いがかなえられるというので、車いすの人などもかなり訪れている。ここでは壁から染み出る水を飲むと病などが治るといって沢山の人が順番待ちをしてペットボトルに水を汲んでいる。人口の岩の壁の間から蛇口を通じて出てくる水なんて効力あるのかなあ。日本でも岩の間からありがたい水が出てくるところがあったなあ。見張りのおじさんがいて、帽子をかぶったままの人やちょっと大きな声を出す人がいてもにらみを利かせている。感じ悪い！

日本じゃあキツネでもサルでも家康みたいな嫌な人でも死んだら神様にしちゃって、神社に行ったときには拜んだりする。ケトウ野郎たち見習えよ。



トゥールーズの街



ルルドの教会



ルルドの水くみ場

③ 7日-3 (トゥルモース圏谷)

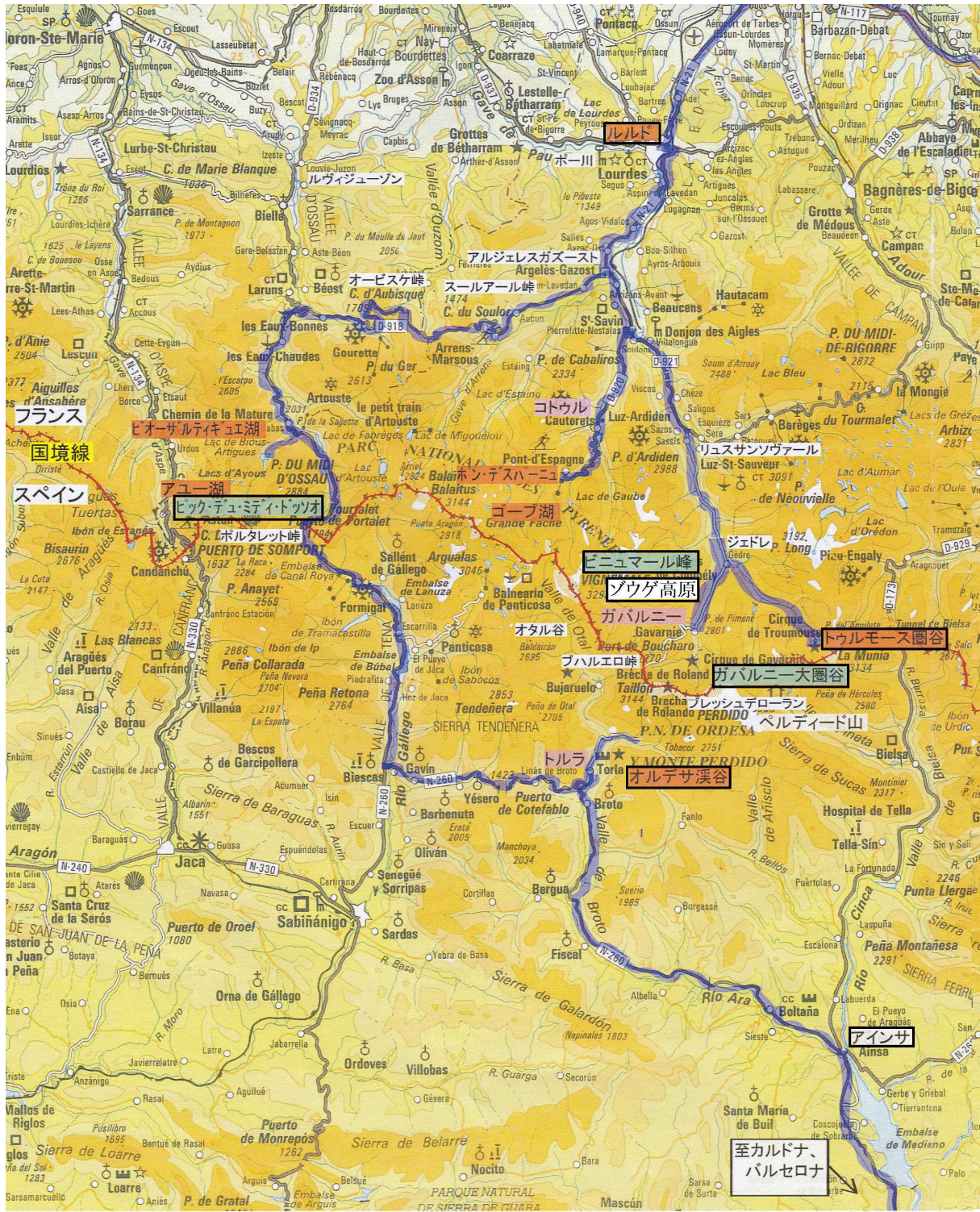


世界遺産に指定されているピレネー山脈のガルバニーの一角にトゥルモース圏谷がある。岩壁にぐるりと囲まれたダイ野ッパラであり日本でいえば車山高原の周りに岸壁があるとでもいおうか。プラプラと1時間ほど、とりあえず女神さまの像のところまで行こうということで行ってみたがケッコウきつかった。



境港ご夫妻のダンナの方はシャシンキチで精力的に景色や高山植物を撮りまくっている。1975年に北アルプスの黒部五郎岳あたりでプロ写真家の大塚大さんに出会ったことがある。シャッターポイントを求めて実に精力的に走り回っていた。その姿を彷彿させるものがあるほど熱心であった。

ピレネー山脈中央部



④ 8日 ガバルニー大圏谷

この日からフランス人ガイドのフリップがピレネーのフランス側のガイドのために4日間ついてくれる。なかしまさんの話では山のガイドはフランスでは地位の高い仕事であるということでケッコウ尊敬の対象であるらしい。フリップはアルパインツアーでは何回も頼んでいるガイドらしく、日本人の扱いに慣れている。高山植物を見つけた時など、“コレナーニ！”などと言って笑いを誘う。我々のツアーが終わるとすぐに次のアルパインのツアーがあるという。

ガバルニーの街は、コトゥルと共にフランス側ピレネーの中心になる街であるのでホテルやレストランなどが立ち並ぶ。

この日は500m余のアップダウンがあって、これがこのツアーで一番大きな傾斜であるという。最近山への自信を無く



フリップ



ガバルニーの街





ガバルニーの街



ガバルニーの牧場



ピレネーの野ッパラと岩峰

しているとはいえ、ちょっとレベルの落とし過ぎか。フィリップが足を止めて大声を出す。“イワタバコ！”名前の由来が判らないが可愛い花である。ムシトリスミレは岩にへばりつくように群落している。ここのものは葉っぱが大きくて長い。空気中の水分捕囚のためらしい。土に近いところのものは、水分補給は土から行うので葉っぱが小さい。



イワタバコ



ムシトリスミレ

⑤ 9日 ゾウゲ高原



この日はガバルニーからゾウゲ高原をハイキングしてコトゥルへの移動である。ここは多分世界遺産とは関係ないのではないかとと思われるが、ピレネーの要素をふんだんに取り込んだ高山地帯である。フランスではツール・ド・フランスの自転車レースが有名であるが、トレイルランも近々行われるらしく、コース案内プレートが設置されたり、トレイルランの練習に励む人たちが散見される。このあたりの高原はすべてそうであるようで、かつては高原野菜の産地であったらしい。その当時をしのばせる作業小屋かあちこちに見受けられる。フィリップが“あの小屋の端っこはなんで階段状になっているのですか？”と回答を求めてくる。昔はワラぶき屋根であったので、その終端処理のための作業性の向上が目的らしい。フィリップが屋根に上って動作で示してくれる。



作業小屋

⑤ 10日 ビニュマール峰北壁展望

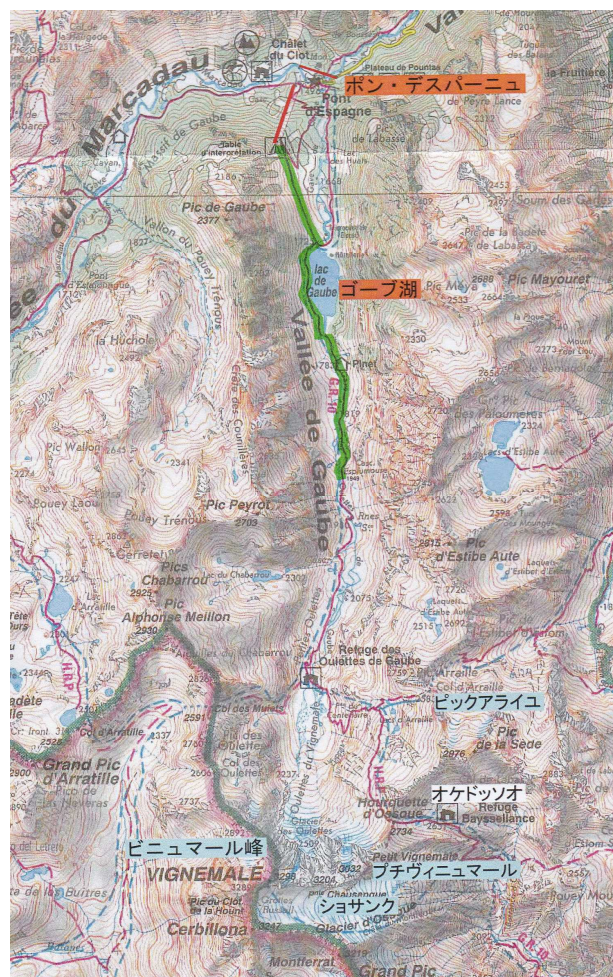


ゴープ湖

ポン・デスパールニュからリフトで一登りしてお花畑の中を歩くとゴープ湖のほとりへ出る。さらに沢沿いを詰めてビニュマール峰が一望できる地点までハイキング。ピレネーの沢は全体に水量が多い。



水量の多い滝





はるか遠くの右端にわずかに見えるのがピニュマルらしい

遠くの右端に僅かに見えるのが名峰ピニュマル峰（3298m）であるらしいが、名峰と言われてもこんなに遠くては有難味は感じない。

この日も一面の高山植物の群落である。名前を覚えるよりも群落を楽しもうという気持ちになってきて、名前なんかどうでもよくなる。これは覚えられないことの言い訳ばかりではない。この一帯の美しさに対する賛辞である



川沿いに咲くキンポウゲ

⑥ 11日 ピック・デュ・ミディ・ドッソオ展望



この日も名峰ピック・デュ・ミディ・ドッソオ（2884m）展望と案内書にはタイトルがつけられていたが、やはりあくまでも広い大草原が我々にとって楽しめるポイントであろう。広っぱに据えられた巨人の自転車はこの広さを象徴するオブジェか。馬がその青春を謳歌するように走り回っている。





全員集合



キツツキの仕事完成披露

⑦ 12日 オルデサ溪谷



トレッキングの最終コースは、スペイン側のピレネーでオルデサ溪谷である。スペインではスペイン人ガイドが付く。トルラの街でスポーツ店を営む〇〇さんがガイドの資格も持っているようで、2台の車で我々をオルデサ溪谷へ運んでくれる。2台目の車の運転をしてくれた××女子がこの日一日のガイドをしてくれるようである。太り気味だが足がきれいだ。



スペインではスペイン語の指導票があるのは当たり前であるが、これを新鮮に感じってしまうところがヨソ者のヨソ者なところか。ピクチャーポイントにカメラの絵が付いているところなどがそのような感覚を持つ理由かもしれない。





オダマキ



ムシトリスミレ

ここでもフランス側同様にたくさんの高山植物に恵まれている。オダマキは群生しているが、アメリカのデンバーでも感じたことであるがどうも品の良さが感じられない。北アルプスに咲くオダマキはもっと気品がある。オダマキは日本に限る。

玉キンバイはこのやつが良い。

フランス側ピレネーは、ヒマラヤやロッキー山脈と同様な、大陸間の衝突による隆起山脈であったが、スペイン側はこれに火山性も加わっていると説明された。どうも頭の悪さ



玉キンバイ

に感覚の鈍さが加算されている俺にははっきりとは理解できなかった。

ヨーロッパ名物のエーデルワイスはやはり可愛かった。日本ではハハコグサなどウスユキ草の類がたくさんあるが、ここではこれしかない。そこが良いのであろう。このアツモリソウは黄色い。それが当たり前らしい。ロシアでは茶色だった。



エーデルワイス



アツモリソウ

この日は私にとって 73 回目の誕生日であった。海外で誕生日を迎えるのは 2012 年のカサブランカに次いで 2 回目である。なかしまさんの計らいでトルラの街のレストランのオヤジさんがケーキにろうそくを立てて歓待してくれた。ニッコリ。調子に乗って“ピレネーの山の男”を歌ったが知ってる人が少なかった。戦後の混乱期にラジオ買えなかった家に生まれた、ビンボー人メ！



⑧ 13日 アインサ&パラドール



アインサは街そのものが城砦に囲まれたようなところである。おそらくそのような説明がされたのであろうが、今回のツアーも後半になって歩くところは終わったという安心感で、何にも聞いていなかった。

街なみはローマに占領された時代の造りの名残であろうかフランス側の街なみと似ている。南米のペルーやアルゼンチンのスペイン風とも似ている。なんだみんな同じように見えてるんじゃないか。外側からしか見なかったが、中に入ると暗そうだなあ。





パラドール・カルドナ

この日の宿泊地はパラドール・カルドナである。これこそ城塞である。この城塞の中に教会もホテルもレストランもある。下の街との高低差は100m ありとされ、街にお土産を買いに行くのに覚悟が必要であった。実際には下の街から上まで真面目に歩いて10分であった。城砦の中にホテルや教会がある。ここに立てこもって敵の攻撃に対応したのであろう。



パラドールの街



パラドールの教会

⑨ 14日-1 モンセラット



奇岩を積み上げたような山に教会やホテルを建てて聖地としているが、どう見てもただの観光地である。これ以上悪口を言うとクリスチャンに狙われるなあ。



⑩ 14日-2 サグラダ・ファミリア

あの、あまりにも有名なサグラダ・ファミリアである。

当初は完成までに 300 年かかると言われてまだ 100 年先と思われていたが、今の定説は 2026 年完成になっているようである。建築設計の IT 化がスピード化を可能にしているらしい。まあ現時点で世の中の中心として活躍している人達が生きている間に見たいのであろう。

このツアーに参加して理由の一つにサグラダ・ファミリアを見られることがあったのであるが、すべて教会であったことを知って、ガク。

自撮りをする人が多いのでビックリ。セルフイーという英語もあるらしい。



サグラダ・ファミリア内部



自撮り棒

⑪ 14日-3 フラメンコショー



夜はスペインおなじみのフラメンコショーである。もっと興奮するのかと思ったらそうでもなかった。俺も枯れてきたのかなあ。青春の血よ、どこへ行った。

メンバー中一番年下の八戸夫人は俺の誕生日の時にハンディテープをもってきて、何とか小唄を唄って踊っていたぐらいであるから踊りだすかと思ったが、スタイルでかなわないから止めたみたいだ。松戸未亡人も阿波踊りの会員であると言っていて、俺の誕生日の時も笙を吹いてくれたりしたが、これも乗り切るまでには至らなかった。まあ当たり前だ。亭主が死んで5年になるというのにいまだに亭主ののろけ話を平気でする。もう一人の大和さんは踊りはやらないが海外旅行が一番多そうだ。次の旅行も決まっているという。

この旅行から帰って一週間になるが不眠症になっている。飛行機では往復とも全く眠れなかったし、それが続いてしまってこのところ毎日の睡眠時間は3時間以内である。こんなこと始めてだ。こんなことを気にする俺ではなかったはずであるが。どうせ暇なんだから昼間寝ればいいじゃん。と言いたいけど昼間はぼっちり目が覚めている。夜になるのが怖い。